青銅の基督・この男を見よ

長與善郎

現代日本

青銅の基督・この男を見よ

長　與　善　郎

現代日本名作選

筑　摩　書　房　版

青銅の基督・この男を見よ
－現代日本名作選－
長與善郎

發行者　古田晁
東京都文京區台町9

印刷者　曾根盛事
東京都品川區大井寺下町1430

發行所
株式會社　筑摩書房　東京都文京區台町
振替　東京165768

昭和29年1月10日　印刷
昭和29年1月15日　發行

定価　180円
（地方實價190円）

扶桑印刷株式會社印刷・黒田製本

目次

青銅の基督　1
この男を見よ　69
最澄と空海　129
解説　福田清人　173

青銅の基督

——一名南蠻鑄物師の死——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

父秀忠と祖父家康の素志を繼いで、一つにはまだ德川の天下が織田や豐臣のやうに榮枯盛衰の例に洩れず、一時的で、三代目あたりからそろ〳〵くづれ出すのではないかと云ふ諸侯の肝を冷やす爲めに、又自分自らも內心實はその危險を少からず感じてゐた處から、さし當り切支丹を鎗玉に擧げて、凡そ殘虐の限りを盡した家光が死んで家綱が四代將軍となつてゐた頃の事である。

實際、無抵抗な切支丹は、所謂柔剛その宜しきを得て、鄰に似合はずパキ〳〵と英明振りを發揮して、早くも「明君」と云はれた家光が、一方「國是に合はぬ」事は何處迄も嚴酷に懲罰して假借する處がないと云ふ「恐ろしさ」を諸侯に示すには得易からざる無難な好材料であつた。「何と云つてもまだあの靑二才で」と高を括つて見てゐるらしく思はれた諸侯達を、就職のとつ始めから度膽を拔いてくれようと思つてゐた若將軍の切支丹に對する處置の酷烈さと、その詮索し方の凄まじい周到さとはたしかに「あはよくば又頭を擡げる時機も」と思つてゐた諸侯の心事を脅し、その野望を斷念せしめて行くには效き目は著しかつた。奧羽きつての勢力家で、小心で、大の野心家であつた伊達政宗さへ、此年少氣鋭な三代將軍の承職に當つて江戸に上つた際、五十人の切支丹の首が鈴ヶ森で刎ねられるのを眼のあたり見て、その耶蘇教に對する態度をガラリと變へた程であつた。

かくて何でもかんでも德川の基礎を萬代に固める事が自家一代の使命であると心得てゐた家光は諸侯と直接刄を交へて壓迫するやうなまづい手段に依らずに、諸侯がとも角も同意しない譯に行かぬ理由と名義の下に、此日本の神を否定し、佛を否定し、國法を無視し、羊のやうな柔和な顏をして、其實國土侵略の目的を腹に持つてゐる狼の群を鏖殺しにする事に依つて、間接に德川の威勢を天下に示し、同時に自分の反照を眼のあたり見る事が出來る事を此上もなく面白がり、喜んだ。何となく氣味のわるかつた姻戚の伊達政宗迄が思ひがけない奧羽での切支丹迫害の報告書を奉つた時、彼は自分がもうそれ程迄におそれられてゐるのかと云ふ得意の爲めに、まだどこか子供〻〻した俤のぬけきらぬ顏を赭くし、パタ〳〵とその書面を叩き乍らそれを奧方に見せに座を蹴つて立つた程であつた。

併し切支丹が神の道と救ひの敎へを說くと稱して實は日本侵略が目的であると云ふ事は只彼の構へた口實ではなかつた。實際彼はさう信じてゐたので、それは又その筈であつた。朝廷に最も勢力のあつた神道主義者と佛僧との耶蘇

教に對するあらゆる反對讒訴姑息な陰謀は秀吉時代からの古い事であつたが、まだその他に商業上の利害の反目からフランシスコ・ザヱリオ以來日本の貿易と布教とを一手に占めてゐた葡萄牙人を陷れようとして、元來西班牙の廣大な領土は宣教師を手先に使つて侵略したものだと實しやかに述べ立てる西班牙人があり、又家康の時には更に西班牙と葡萄牙とを商敵とする新教國の和蘭人が現はれて家康の前に世界地圖をひろげ、耶蘇教國の君主すら宣教師を危險視して國外に放逐してゐる位であるなぞと云つて眼の前で十字架をへし折り、聖母の畫像を踏みつけて見せた事もあつた。のみならず捕獲した葡萄牙の商船から發見したものだと稱して僞造の密書——所謂「和蘭の御忠節」を勿體らしく捧呈したりしたのである。

さなきだに切支丹には誤解される點が實に多かつた。罪を犯して悔い悲しむ者は、罪を犯さぬつもりでゐる過ちのない傲慢な者より救はれ易いと云ふ意味が罪その物を肯定する教と見做された事も當然な事であつたが、又靈魂の救はれる事の爲めに肉體の死苦を甘んじると云ふ事がやがて死の讃美に思はれ、そしてその死に民衆を「嗾かす」ばてれん達は又國民を亡ぼして行く者と見做された事なぞも凡て尤もな事には相違なかつた。

且つ慶長の初めには疫病が流行り、天變地異がつゞいた。こんな事を佛僧や神官が神佛の怒りとして持ち出さずにはおく譯はなかつた。秀吉はそれには耳を藉さなかつたが、切支丹の一婦人に懸想してその婦人を妾にする事が出來なかつた時、始めて本當に切支丹を憎いと思つた。彼はその女を裸にして竹槍で突き殺させた後で、今日吾々が子供の時から耳にタコが出來るほど學校で聞かされた常套語の元祖を放つた。

「外國の土に善く適ふからと云つてその木をすぐ日本へ持つて來て植ゑると云ふ事は間違つてゐる。日本には日本の櫻がある。」

そして自ら朝鮮を侵略して行つた此猿英雄は一度でそれが懲らし得るつもりで、先づ廿六人の「侵略者」を長崎の立山で磔刑にし、虐殺の先鞭をつけた。

家康は秀吉よりも一層切支丹を最初から嫌つてゐた。德川の運命と同じく、切支丹の運命にとつて致命的であつた關ヶ原の決戰が濟み、切支丹の最も有力な擁護者であつた石田三成、小西行長、黑田孝高等が滅び失せて後は元和八年の五十五人虐殺を筆頭に露骨に切支丹迫害が始められた。かくてそれ迄は自ら洗禮をうけ、或は切支丹に厚意を持つてゐた西國の諸侯は幕府の嫌疑を怖れるが故に改宗し、切支丹の討伐にかゝつた。そして爾後切支丹の根絶やしは德川家代々の方針となつた。

寛永十五年正月島原の亂が、片付き、續いて南蠻鎖國令が出て後、天文十八年以來百餘年の長きに亘り、二千人以上の殉教者と三萬數千人の被刑者とを出して尙執ねく餘炎をあげてゐた切支丹騷動なるものは一段落ついた樣に見えた。

「一つ時はほんに日本全國上下を擧げて靡いた位えらい勢ひぢやつたもんぢや。信長が本能寺で討たれた頃にや三十萬からの生粹の信者がをつた相な。それが此通り消え細る迄にやお上の仕打ちも隨分と思ひ切つて酷ごかつたが、片つ方も、亦執つこいとも執つこいもんぢやつた。がかうなつて見れや此れや此國に切支丹が容れられなかつたと云ふなあ、夫が結局天主の御所存ぢやつたのかも知れんてな。」

こんな疑念がひそかに切支丹に厚意を持つ人々の念頭にもきざしかけてゐたその頃の事である。それでもなほ全國市町の要所々々には

定

きりしたん宗門は累年御禁制たり、自然不審なるもの有之者申出づべし、御褒美として

ばてれんの訴人　銀三百枚
いるまんの訴人　銀二百枚
立ちかへり者の訴人　同斷
宗門の訴人　銀百枚

同宿並にかくし置き他より顯はるゝに於ては其處の名主並びに五人組まで一類共可處嚴科也、仍下知如件

奉　行

と認めた檜の高札がいかめしく樹てられてゐた頃の事である。

長崎の古川町に萩原裕佐と云ふ南蠻鑄物師がゐた。

二

「おい。お佐和。此間のあの『虎』をどこへやつたんだ。」

「よくもかう珍なものを集めたものだ」とつい人がをかしくなるほど煤ぼけた珍品古什の類を處狹く散らかした六疊の室の中を孫四郎は易者然たる鼈甲の眼鏡をかけて積んである繪本を跨ぎ、茶盆を跨ぎして先刻から机の上、床の間、押し入れの中と頻りに引つくり返して何か探してゐたが、かう荒々しく聲をかけた。

「ぬしは又賣つちまつたんだらうが。え？　俺にかくして。」

孫四郎の調子にはもうやゝ、刺があつた。その刺にさゝれて、隣りの四疊で針仕事をしてゐた細君はやぶれた襖をあけた。

「まあ、『又』なんて誰がいつそんな事をしましたらうか。」

やゝ上氣した頰の赭味のために剃つた眉のあとが殊に蒼く見える細君はかう云ひ乍ら羞ぢらひげに微笑んだ會釋を客の裕佐の方へなげ、「まあ、此散らかし方！　まるで居屋さんのやうですわ。」と尻上りの調で云つて一寸突つ立つた。

「貴樣、探して見い、ありやせん。」

孫四郎は邪慳にかう云ひ捨てゝ敷けば却つて冷た相な板のやうに重い座蒲團をドサリとわきへ放りなげ、長煙管の雁首で、鐵に銀の象嵌をした朝鮮の煙草箱を引き寄せ乍らその長い膝をグッと突き出して坐つた。

「それやこんなものよりやずつと傑作ぢや。此間の緣日の虎を早速やつて見たんぢやがな。」

彼はかう云つてひよろ長い體の居ずまひを直し、裕佐が緣近く持ち出して胡坐をかいて見てゐた一枚の繪を煙管でさした。それは山田長政が象に乘つて暹羅の國王の處に婿入をする圖で、版畫にする原畫であつた。

「ほうら。ありましたがな、こんな處に。矢つ張り貴郎が御自分でお藏ひになつたんですわ。」

細君は嬉しさの餘り白い脛を一寸あらはして、束になつてくづれてゐる錦繪を跨ぎ、安心と怨めしさとが一緒になつて堅くなつた表情を向け乍ら一枚の繪を夫に渡した。そして「いつだつてかうなんですの。」とやゝとげ〳〵しく云つて、そのとげ〳〵しさに自ら上氣した顏を更にぽつと赭らめ乍ら裕佐に笑顏を見せ、チラリと又夫を顧みて、次ぎの間へ去つた。

「あつたか。」孫四郎はうけ取り乍ら一言かう言つて、大事さうにフッと一息かけ、

「こゝへ來て御覽。こゝの方がまだ明るい。」

と云ひ乍らその繪をサラリと敷居の上へなげ、飲み殘しの冷たい茶をゴクリと一息に呑むと今度は眼鏡の球を袖口でこすり乍ら下から覗き込むやうにじろり〳〵と裕佐の顏を視入るのだつた。

諏訪神社の緣日に虎の見世物が出て非常な人氣を博した事はついその十日程前の事であつた。孫四郎の繪ではその虎の檻が街頭に引き出されてゐる。「朝鮮大虎」「大入々々」「大人一文小兒半文」と書いた札を背にして切りに客を呼んでゐる男が一方にゐる。かと思ふと張り子のやうな虎が檻一杯に突つ立つていかめしく睨んでゐるその檻の前には「おらんだ人」と肩書きのある紅毛碧眼の異國人が蝙蝠傘をさした日本の遊女と腕を組んで、悠長にそれを見物してゐる。ステッキをついて猩々のやうに髯を生やした馬鹿に鼻の高い「おろしや人」が虎よりは見物人の方を見乍ら長閑にパイプを喫かしてゐる。大小をさした丁髷の侍のわきには日本の子供と中國の子供とが遊んでゐる。——

「ふむ。――」裕佐は思はずその繪のユーモアに微笑まされた。「なるほどこれや面白い。」

「近來の傑作ぢやらうがな。へッへ。」

むしろ好んで皮肉を衒ふやうなその歪んだ口許に深い皺を寄せ乍らにや〳〵と傲りがに裕佐の顏を見てゐた孫四郎はかう云つて高く笑ひ出した。

「傑作ですね。版にしたら又一しほ面白いでせう。」

その笑ひ聲の下品さに嫌氣を感じ乍らも裕佐はかうほめざるを得なかつた。「あの虎は君が畫くと面白からうと僕も思つてゐたんです。」

「へ、へ。中々見逃しやせぬよ。」

と孫四郎は又雁首に煙草をつめながら、

『往來にさらしてある見世物に『大入』はをかしいが、そこがかう云ふ愛嬌ぢやでな。」かう云つて又笑つた。たしかに齡よりは十位老けて見えるがその實漸く四十になつた許りの此繪師は當時長崎きつての唯一の版畫師であつた。

實の處裕佐は口に出してほめた上に內心感服――むしろ驚いてゐたのであつた。「實際變な奴だ」と彼は思ふのだつた。人間としては猶ほ更の事、畫家としての孫四郎にも彼は決して飽き足りてはゐなかつた。孫四郎は趣味のみに生き、自分は趣味のみに生きる事は出來ない。趣味のみに生き得る孫四郎の趣味はどうしても偏頗で局部的であり深みがない。自分はよし趣味によつて繪筆を執り、鑿を把る事があるとも、その趣味はいつしか消えて見えなくなり、それに代つて全身の心が現はれ、直ちに萬人の心をピタリと打つ底の生ける魂が嚴として作品を支配しきる處迄行かなくては氣がすめない。

孫四郎の畫くものが現に面白い事は否定出來なかつた。唯「面白い」と云ふ丈けにすぎぬ藝術は所詮二流以上のものではあり得ないと裕佐は思つてゐた。併しその一流の境を求める自分はまだその俤の窺はれる仕事すらしてをらぬのに、孫四郎はとも角その「面白い」自家の一道を既に摑まへてゐる。「山田長政」や「虎」の繪にはその「摑んだ」と云ふ感じが顯著に出てゐる。そして彼はその狹い道の上で傍眼もふらずにめき〳〵と進みつゝある。孫四郎の到底了解し能はぬ底の傑作にも廣く共鳴を感じ得る自分は、まだその廣汎な理解と燃えたぎる深い內心の欲求とを寸分も生かして居らぬのに孫四郎はとも角その卑俗な趣味の偏狹に徹底して、それを自家の製作の上に生かし、悠々自適してゐる。かくて裕佐はその先輩に飽き足らぬ乍らも一方羨ましく思ひ、その「面白さ」さへもない自己の仕事を顧みて淋しく感ぜずにはゐられなかつた。

「どうも僕は少しいろんなものに引かれすぎるのかな。」

裕佐は思はずかう嘆息を洩らして破れ芭蕉の亂れてゐる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

三坪ばかりの庭の方を向いた。

「いろんなものに引かれるのは結構ぢやないか。つまりそれ丈け、おぬしは眼があるのだからな。」

さう出られゝば「勿論」と裕佐は云ひ度くなるのだつた。しかし自分の裡にはたしかに孫四郎なぞの窺ひも得ぬ何かがあると自信してはゐるものゝまだその現の證據を實現した譯ではない。實現して眼のあたり見た上でない以上矢張り内心不安であり、空虛である。畢竟誰にでもある單なる自惚れ、架空の幻影ではないかと疑ふ。自分で疑ふ位なら人が見縊る事に文句は云へない。

「とに角僕は何か一つの道に徹底したいよ。差し當り僕はどうもその事を願はずにはをられない。自分が結局どの道にも徹底出來ない質なのでないかと云ふ氣がどうもしてな。」

裕佐は又おとなしくかう云つてかゝへた膝をゆすぶつた。

「ふむ、徹底すると云つたつて、こんな一文や二文のおもちや仕事に徹底したんぢやおぬしは滿足は出來なからう。もつとえらい仕事でなけれやな。——わたしの仕事なぞは貧乏人の子供相手の乞食仕事だ。之れで隨分丹精はして造る。こんな阿呆らしいやうな繪草紙一枚だつて見かけよりや骨を折つとるんだ。しかしいくら骨を折つたつて結句子供だましの夜鷹仕事だ。でもこんなのらくらの遊び人の繪をとも角も一文や二文で買つてくれ手があるから不思議さな！　どうで雪舟も山樂も拜む事の出來ぬ看屋や八百屋の熊公八公がわたしの御上客だ。殿樣だ。それがわしには相應しとるて。ヘッヘッヘ。奴等にや又わしのやうな乞食繪師が相當しとるんだ。だからわしのやうな者もなけれやならんのさ。雲上人相手の白拍子ばかりぢや世の中は足らん。熊公八公相手の夜鷹もなけれやな。どうだ。君も徹底して夜鷹になるか。」

孫四郎はかう云つて煙脂だらけの黑い口をあいて笑つた。

裕佐が此版畫家に對して何よりも嫌に思ひ、それがために友に飢ゑてゐ乍らもさう繁〻と訪ねて深くつき合ふ氣にどうもなれなかつたのは實に此男の下等な僞惡趣味であつた。

人の心持ちを何でも下等に淺薄に解釋して獨り見拔いたやうな得意の薄笑ひを浮べ、人がそれに不快を感じて何かヘコマすやうな事を云ふと誰も呶鳴りもしないのに「まあさ、さう呶鳴らんでも」と云つて笑ふ。笑へば必ず故意の冷笑である。いかなる場合にも冷笑することが人生で最も優越な事であると思ふ事にしてゐるらしい此男は、人情として笑ふ事が必ず不可能である場合にも必ず意識してヘラ

ヘラと笑ふ。何がそんなにをかしいかと訊けば「何もかもをかしいのだ。自分自身も可笑しいのだ。」と答へて又笑ふ。無論決して本當にをかしいのではない。只をかしがる事が好きなのである。をかしがつてゐたいのである。そして又をかしがり度いために凡て人生一般の對象物をその冷嘲の的となる下賤な階級迄引きずり降ろさずにはおかないのだから、相手が不快がるのは無理はない。そして相手が苛立てば苛立つほど彼はます〳〵その犬儒主義を享樂する上に滿足を感じて、相手が何でそんなに苛立つのか合點が行かぬやうな顏をして冷靜にかまへるのみである。それが彼の「勝利」なのだ。

併し、今彼のくだ〳〵しい毒舌を聞いた者は、彼の冷かな犬儒趣味が決して單なる彼の興味から出るものではない事を容易く見拔き得たであらう。表面氷の如く見える彼の自己冷嘲の奧には苛立たしい刺があり、ひねくれた者の弱い火があつた。その火は彼の裏切つて蒼ざめた頰をぽつと赭くしてゐた。

「しかしとに角君は畫家ですよ。僕は畫家ではない。」

「夜鷹」と云ふやうな言葉をつかふ孫四郎の興味に例の厭氣を催しながらもその上氣した顏を見ると何となく氣の毒なやうな氣がして、裕佐はかう云つた。

「低いなりにもな。ハ、ハ。わしは之丈けの繪商人さ。何と云つたつて。併しおぬしなぞは生れから云つてもわしなぞとは仕事の譯がちがはなけれやならん。それにまだ若いし――あせる事はないさ。些しも。」

何の親切氣もない調子でかう云ふと彼は長い立て膝を抱へ乍らその冷却した顏を又横に向けた。

「此間の又兵衞張りの人物畫はどうした。面白く行きさうだつたが。」

「駄目だ。ふむ。」

只「人物畫」とは云はずに「又兵衞張りの」と一寸嫌がらせを附け加へずにはおかない彼の癖に、裕佐がかうぶつきら棒に應じたのを、孫四郎はなほ平然として訊いた。

「君、鑄物をやる氣はないんかね。阿父さんの傳法でやつて行きや、忽ち日本一だが。」

「ふむ、誰もまだあの術を知つてゐるものは他にないからな。」裕佐は孫四郎の言葉の意を自分の方から云つた。

「あれでも其道のコツを飲み込む才がありさへしたら案外面白い、いゝ仕事が出來るもんぢやないかとわしは思ふがなあ。」

俺がやつたらと云ふ顏附きで孫四郎はかう云ひながら蒼い頤をなでた。

「さうも思へるが、どうも僕にや……」

「物足らんか。望みが太いでな。はゝ。」

かう云つて孫四郎は形だけの欠伸をした。

「姐さん。一寸出てみなされ。又お通りですよ。」

此時上口の格子戸をガラリとあけて、かう娘の聲が聞えた。

「あら、さう。もうそんな時刻でせうか。」

かう云つて細君は襖を開けて現はれ「萩原さん。一寸出て御覽なさらない。おいや?」と口についた糸を指で取つて丸めながら二人の方を向いて云つた。

「何です。」裕佐がかう云ふのを「丸山連さ。」と孫四郎は「知つてゐるくせに」と云はぬ許りに押へつけるやうに云つて、「おいやな事もなからう、切支丹ぢやなし。なア。」と裕佐の顏を流し眼に見て附け加へながら立ち上つた。

「でも貴方なんぞ御覽なさらない方がいゝわね、毒ですわ。」細君はむつつりと下を向いてゐる裕佐の方にかう云つて出て行つた。

異國に對して嚴酷であると共に臆病であつた幕府は當時長崎在留の異國人の住居を出島の廓内に禁制すると共に、一方丸山の遊女を毎夜そこにつかはし、侍らしめて、紅毛人の歡心を買ふ事につとめてゐた。

雨の日も灯ともし頃になれば、三十人、四十人の遊女がさはればボロ〳〵と剝げて落ち相な粉飾に綺羅を盡し交代に順番に應じて、奉行から差遣の同心に驅られ、曳きずられて、丸山から出島へと練つて行くのであつた。そして其の翌曉には前夜のそれとは見まがふ程の落剝した灰色の姿に變つて三々五々蕭條と又丸山へ戻つて行くのであつた。

「さあ、此方もそろ〳〵お出掛けなさるか。今夜こそ一ちよあれを描いてやらんにや。」

「何を。」と裕佐は「もう此處へは決して二度と來まい」と心に呟き乍ら云つて起ち上つた。

「おらんだ屋敷さ。『紅毛人遊興の圖』だ。」

孫四郎はかういひ乍ら半紙を綴ぢた帳面を懷に入れ、矢立ての墨を更めて、腰にさすと變に興奮した體で衣紋掛けの羽織を取つて引つかけた。

「まあ、又お出かけ。萩原さん誘惑されないやうに用心なさいよ。」

出て來た夫の出で立ちを見ると細君は光る目で裕佐の方を見乍らかう云つた。

「へ、へ、誘惑されちやいけませんは皮肉だな。」孫四郎は延び上つて行列の方を見乍ら云つた。

「どうだ。一緒に行くか。童貞の青年。」

「いや僕は此處で失敬します、では又。」

裕佐は細君の方に向つてかう云ふと、薄暗い人込みの中にすぐ姿をかくして了つた。

三

「俺は弱過ぎる。なぜかう人を求めるのか。後で必ず後悔する事が分つてゐるのに。」

裕佐は何遍も自分にかう云つた。そして時〻後ろを振り向いた。背の高い孫四郎が群衆の上に延び上つて、その蒼ざめた小さな皮肉な顔で笑ひながらどこ迄も自分の跡を見送つてゐるやうな氣がしてならなかつた。彼はその視線を背中に感じてムヅ〳〵するやうに體を顫はした。「行列を盜み見てゐるあの眼のあやしさを見ろ、わしが誘惑するもないもんだ。へ、あの猫被り奴。」こんな事を何もかも見拔いたやうな調子で細君に云つてゐる孫四郎を後ろに想像すると、彼はたまらない惡感を感じ乍らも、不思議にその豫言に支配されるやうな氣がしてならなかつた。

然し大股に急ぐ彼の步調はいつの間にかのろくなり勝ちだつた。眠むくてたまらぬ者が氣がついては眼を無理に開き乍らもつい居睡りをする樣なものであつた。何とも云へぬ淋しさが重い黑雲の樣に上から彼の頭を抑へつけてゐた。自分を信じない者が唯孫四郎に止まるなら「あんな奴に俺の何が分つて堪るものか」と平氣でゐられる。併し孫四郎の冷たい表情の裏には同じ相好の運命の顏があるやうな氣がした。それを自分の莫迦らしい氣の故であるといかに思ひ、その不快な幻影を拂ひ退けようと頭を打ち振り乍らも腦裡にこびりついた孫四郎の顏は只孫四郎の顏とは思へず、その皮肉は只孫四郎の皮肉とは思へなかつた。此方が力なく反抗すれば向うは更に恐ろしい聲で「あいつに何が出來るか、ヘッヘ！」反響し相に思はれた。

彼はステッキで堅い地を叩き、咳拂とも、叫びともつかぬ聲をしぼり出して空を仰ぎ、そして步いた。通りでは遊女の列にからかふ男の下等な笑ひ聲や、甲高い氣違ひじみた女の聲が聞こえた。一種の本能で裕佐はその行列を見るのはいやだつた。それで小路に入つた。しかし何方へ向つて？　彼は自分の家の方へは行かなかつた。彦山の中腹を少し降りた處に父の建てた自分の古家。六十になる出戻りの伯母と二人で彼が住んでゐるその家には朝日はよく照るのだつた。日が照つてゐる間そこは彼にとつて眞に落ちつける唯一の溫い自家であり、「道場」であつた。彼はそこに祀つてある「伎藝天」と共に暮して少しも淋しくなく、孤獨の樂しみに充實して醉つてゐる事が出來た。しかしそこは晝の家である。日が向ひの稻佐獄に隱れて、眼下の町〻にちらほら灯りが瞬き始め、さら〳〵と云ふ夕の肌寒い風が障子の穴から忍び込むが否や、彼に全く新しい第二の一日と世界とが始まり、彼は落ちつきを失ふのだつた。天上

に二三の星が何かを招くやうにきらめき、地上にぽつ〳〵と明りが光りをそめる事は朝赤兒が眼を明くのと同じ新鮮な感じで彼ををのかすのであつた。かくて夜の世界の不安と寂寥と、戰慄と魅力とが魔の如く彼を襲ひ、捕へた。魔に捕へられる事は恐るべき苦痛であり、又寒い喜びであつた。何かが抵抗すべからざる力で若い彼の心臓を湧き立たせ、眞晝の端正な「伎藝天」迄が妖艶、婀娜な姿に變じて燃える眼で彼を内から外へ誘ひ騙りたてるのであつた。

その家に歸る事は思つた丈けでも恐ろしい苦痛な事であつた。それが苦痛でなくなる迄彼は外で、夜の世界で、疲れ切らなければならなかつた。

彼は大波止の海岸の方へ向つて濱から來る汐臭い秋風に顫へながら歩いた。毎も其處を通る毎に癖のやうに引きずられて立寄るシナ店の前をも彼は今氣がつかずに通り越してゐた。

彼は海岸へ出た。蕭條たる十一月の濱邊には人影一つなく、黑い上げ汐の上をペラ〳〵と撫で來る冷風のみが灯りを點けた幾十の苫舟を玩具のやうに嬲弄してゐた。岸に沿つて彎曲してゐる防波堤の石に腰かけて杖を垂らせばその先きの一二寸は樂に海水にひたる。犇〻と上げくる秋の汐は廂のない屋根舟を木の葉のやうに輕くあふつて往來と同じ水準にまで擡げてゐる——彼はそこに腰をかけた。

海に突き出して一つの城郭のやうに館が右手に見える。點々たる星の空の下にクッキリと四角に浮き出すその家の廣間の中は、煌々としてどの位明るいのかと想はれる。たしかに白晝よりも明るいにちがひない。しかも何と云ふ物〻しい、無氣味な明るさであらう。そこには人の家らしい落ちつきや、幸福は微塵もない。島を圍む黑い漣がぴた〳〵とその礎を洗ふ如くに、夜よりも闇い無數の房々がその明るい大廣間を取り卷いてゐる。そこからは落寞たる歡樂の絃歌が聞こえ、干乾びた寂しい笑ひ聲が賑やかに洩れて來る。——それは普通和蘭屋敷と呼ばれてゐる「出島の蘭館」である。

裕佐はその異樣な家の方に向つて歩き出した。そして歩き乍ら彼はキョロ〳〵と四邊を物色した。孫四郎を彼は探してゐたのである。出島へ渡る爲めには艀に乘らなければならない。艀の渡し守は奉行から遣はされてゐる侍である。異國人と、遊女と、佛僧の外そこへ行く事の許されぬ禁錮の島へ孫四郎の行く譯はない。「どうせ嘘にきまつてゐる。あの道樂者が今更らしくこんな處へ繪なぞ描きに來るものか。」と彼は思つた。しかしさう思つて振り返つた瞬間、彼は大きな、白い、首の長い一つの顔を見たやうな氣がしてギョッとした。彼は身顫ひし、そして怖い物見たさのやうにもう一度それを見た。それは番小屋の後ろから高

く首のやうに突き出た新しい白木の高札であつた。

ばてれんの訴人　銀三百枚
いるまんの訴人　銀二百枚
立ちかへり者の訴人　同斷

同宿、並びにかくし置き、他より顯はるゝに於ては
——云々

の文句が威脅するやうに墨黑々とそれに書かれてゐる。それは人間の書いた字ではなく、鬼の書いた字のやうに思はれた。「ばてれん」とは教父、宣教師の事であり、「いるまん」とは法の兄弟即ち準宣教師の事であり、「立ちかへり者」とは一旦宗門を轉んで再び切支丹に歸つた者のことである。

「誰だ。」歩いてゐた侍は寒むさうに腕をこすり乍ら訊いた。

裕佐は返事をしなかつた。

「何者だ。」

「鑄物師だ。」

「鑄物師とは何だ。」

「銅を鑄る工匠だ。」

「銅を鑄る。そして何をつくる。」

「何でも、富士山でも、君の首でもつくる。」裕佐は一寸からかひ度い氣持ちになつた。

「貴樣よく來るな。島へ行き度いのか。」

「或る女を見度いんだ。だけど行つちや上げないよ。」

そして彼が去らうとした時、眼の前にあつて手に取るやうに猥らな高聲の聞こえて來る和蘭屋敷の二階に女の叫び聲が聞こえて、けたゝましい聲音と同時に大きな菊の鉢が窓から落ちた。そして石に碎ける音がした。一時森とした後、猫を抱いた日本の女の小さい顔と、その上にのしかゝつた恐ろしく亘きな毛むくぢやらの男の顔とが現はれ、そして彼等は何かいがみ合ひ乍ら笑つて、赤いカーテンをおろした。

四

「あなた、もしや——これではなくつて？」

女はふつくらした人差し指で膝の上に十字を描いた。

「何だ、それは。」男は眼を圓るくして女の顔を凝視した。

「これよ。」と女は又書いた。「分つてらつしやるくせに。」

「切支丹か？」

「叱！」

女はあわてゝ制し乍ら眉を寄せて、四邊の氣配をうかゞひ、ほつと息を吐いてからまつすぐに彼の眼を見て、うなづいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.